日本基督教団
東中国教区ニュース
NEWS

東中国教区
教区ニュース誌委員会
〒710-0055
倉敷市鶴形一-五-五
倉敷キリスト会館内
TEL(086)四二二-二七八〇

イースターメッセージ
『復活の主を賛美しよう』

用瀬教会　牧師　稗田 みどり

『驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。』

［マルコによる福音書十六章六節］

稗田みどり　牧師

イースターおめでとうございます。私は嬉しい時には格別に賛美したくなります。どちらの教会でも『さあ、主を賛美しよう！』と礼拝の中で喜びの声が溢れていることでしょう。イースターは、私たちの罪のために主イエスが十字架につけられた後、三日目に復活されたことを記念する日です。復活は、父なる神の痛みと主イエスのお苦しみを通して与えられました。その高く広く深い愛に心から感謝します。

復活を最初に知ったのは女性たちです。安息日の翌朝、女性たちは香料を持って墓まで行きました。安息日が間に入ったのでイエスの亡骸に最後の処置をする時間が無かったのです。ですから「出来るだけ早くその悲しい仕事に取り掛かりたい」と願ったのです。熱心な姿勢から献身の思いが伝わってきます。

彼女たちの心配は、墓の入り口を塞いでいる大きな石を誰が転がしてくれるかということでした。ところが石は既に転がしてあり、墓は開いていて中を見ると天使がいました。女性たちが働こうとした場所は天使の働く場になっていたのです。天使は「主イエスが復活して生きておられる」と告げました。女性たちは高価な香料を手に入れて主のために墓に来たのです。しかしその必要は無くなりました。人の思いを超えた所に神の御計画があります。墓が開かれたのは人間が墓に入っていくためではなく、墓からイエスが復活するためでした。

復活によって新しい命の世界が始まりました。古い自分に死に、墓から出て新しい命に生きる希望が与えられています。私たちの教会は、この復活の主を土台として立っています。キリストの復活は私たちの希望として、しかも最高の赦しと愛に裏打ちされて与えられています。

復活の主への感謝の応答が私たちの生きる喜びです。だから、例え試練や悲しみの中にあったとしても、復活にある希望を握りしめ、復活の主に向かって、心いっぱいの賛美をささげ続けたいと願うのです。

目　次

イースターメッセージ『復活の主を賛美しよう』……1
第一回 宣教会議報告（その1）……2
第二回 宣教会議報告（その2）……3
「鳥取県西部地区2・11集会報告」「鳥取県東部地区2・11リトリート集会報告」…4
第3回 岡山県東部地区合同教会学校報告……5
第十三回 岡山県中部地区大会報告……6
教会紹介　倉吉教会……7
セクシュアル・ハラスメント防止小委員会よりこんにちは……8

第二回宣教会議報告（その1）

副議長　服部　修

はじめに

二〇一八年二月十三日（火）に、第二回宣教会議が蕃山町教会を会場に開催された。第一回宣教会議の内容を踏まえ、それをさらに発展させることを目的に、「東中国教区の宣教強化のとらえ直しについて」をテーマとして協議することとなった。活発な意見交換を行えるようにするため、事務方には苦労をかけたが、あらかじめ「東中国教区宣教会議声明」の原案および「教会強化特別資金運用規定改訂案」を出席者に配付した。

協議会に先立って、二〇一八年度予算の原案が濵上進財務部委員長によって報告されたが、日本基督教団の伝道資金が開始したこともあり、教区の財政が伝道資金の負担金によって厳しい状況下にあること、しかし、伝道資金の活用によっては各部委員会や地区活動の活動に支障が出ないように考慮できることも報告され、基本的には財務部委員会の原案を了承する方向となった。

宣教強化のとらえ直し

教区の経常会計が現状ではかなり厳しい状況になってきたことを考えると、教区の活動そのものを大幅に見直す必要が生じる。その場合には、「宣教強化のとらえ直し」が必要であり、ここで一致していかなければならない、との思いは第一回宣教会議においてある程度共有できていると思われる。だからこそ、今回の会議においてその一致をどのようにすべきか、ということが議論の中心点となる。

ともすると、このような議論においては、総論賛成、各論反対、といった図式に陥りやすいものではあるが、それを乗り越えるためには意識の変革なども必要になる。「東中国教区宣教会議声明」はそのことを願って常置委員会が作成した文書の一つと言える。

協議会の中ではこの声明についても、さまざまな角度から意見が出された。常置委員会としてはそれらの意見一つ一つを大切にしながら、教区総会までに一つの形を作りたいと願っている。

教会強化特別資金運用規定改訂

宣教強化は、具体的に財を用いる必然性も生まれる。そのために、教団の伝道資金を踏まえながら、東中国教区として、教区内に存在する教会を宣教・伝道のために不可欠の拠点として守るために特別資金が用いられることを願っている。宣教会議で提案された改訂案はその願いの上に立っている。誰が得をするとか損をするという話ではなく、教会そのものが支えられ、強くされていくことが教区の教会の力となる。これも教区総会までに形を整えたいと願っている。

終わってみれば短い時間であったが、出席者が積極的に協議会に参加してくださったことに感謝している。

宣教会議にて　服部修副議長

第二回宣教会議報告（その２）

「教会の輪（和）を繋ごう」

信徒常置委員　田中英也
（上井教会）

信徒常置委員　右・田中英也さん　左・岡田悠二さん

本年度２回の宣教会議の討議を経て**「宣教会議声明」**が各教会に示されます。来年度総会において具体案が提案されますので、各教会で総会議案を十分検討して、信徒議員の方に意見を託してください。

声明には、「**東中国教区内の四八教会**のうち半数は財政規模の小さい教会ですが、これまで地域の宣教活動の拠点として宣教の歴史を刻んできました。これらの**小教会を地区の教会が**、協働してサポートしましょう。それを支援するのが**教区の果たすべき役割**であると確認された」と記されています。

《協働》の意味（私見）

漢字に着目して解釈すると『イエスの十字架に添い、聖霊の力に導かれ牧師と信徒が共に力を合わせ、人を動かすこと』と理解します。

教団に属する教会の宣教活動は、**「転任のある牧師と定住している信徒」**の両者が互いに《協働》することにより、地域における希望（福音伝道）が豊かな結実として与えられると信じます。

「信徒が変わらなければ、教会は変わらない」

牧師はイエス様に倣い、信徒に寄り添い、思いをよく聞き、励まし、信徒の信仰が高められるように祈りご支援下さい。信徒も牧師のために祈りましょう。洗礼式での水による洗礼を受けただけでは、人生の荒波を乗り越える信仰には育ちません。教会の交わりを通しての学びにより、**イエス・キリストの聖霊による洗礼**を受けることによってこそ、信仰は確かなものへと高められます。信徒の群れの信仰が高まれば、教会は変えられて行くものと信じます。

「教区が変われば地区も教会も変わる」

1　牧師謝儀の考え方を**生活支援から活動支援へ**教会強化特別資金運用規定を見直す。

2　**地区活動を推進する。**
地区内の教会の信徒の交わりを深め、地区体制作りをする。また近隣の地区間交流を促進する。

3　**多様な教会観**に発想を転換する。
一教会一牧師を理想としながらも、東中国教区の現状を踏まえ、地区内の小規模教会の教会強化（礼拝サポート）支援を協働する。

4　**中期宣教計画**プロジェクト報告を踏まえ、出来ることから具体的に実行していく。

余録〈俳句〉

「椿落（つばきお）つ　いかに継（つ）ぐべき　兜太遺句（とうたいく）」

「鳥取県西部地区 2・11 集会の報告」

「されど神の言葉は繋がれたるにあらず」

（弾圧の歴史から学ぶもの）

津山城西教会・美作落合教会
牧師　山本修一

聖書は「過去」にとらわれず、過去に生きてはならないと教えます。しかし「今」を大切に生きるために、過去を学ぶことが必要です。かつての日本において悲惨な戦争、空襲、原爆の体験をしたこと、信仰の自由が抑圧されたこと、キリスト教会が弾圧されたこと…を正確に知る人は少なくなりました。

ホーリネス諸教会は一九四二年六月二六日に日本国内外一斉に弾圧を受け、治安維持法により第一次、第二次合わせて百三十四名が逮捕され、七名が殉教しました。逮捕されたキリスト者は二～三年間拘束され、官憲の侮辱、辱め、拷問、不法な取り調べを受けました。教師職の辞任を強要され、二七五の教会が解散・閉鎖させられ、牧師家族は路頭に投げ出されました。とくに東京地裁で裁判を受けた牧師たちは、米軍の空襲におびえながら、判決を待ちました。

なぜ日本基督教団ではなく、その一部のホーリネス系の諸教会が集中的に弾圧を受けたのでしょうか。どうしてもともと共産党を弾圧するための治安維持法が、キリスト教信仰の弾圧のために用いられたのでしょうか。前者についてはいくつかの根拠・背景はあるものの、歴史的確証には至っていません。後者については検察官の取り調べで徹底的に問われたのは、神社参拝ではなく、「再臨信仰」でした。再臨信仰が天皇体制をおびやかすなど誰も考えられません。近代刑事法の原則、大審院の判例からしても不法な裁判でした。

ところが地方裁判所の判決は有罪でした。さらに不幸が重なります。東京大空襲により、大審院、検事局、地裁などが焼失し、裁判の続行が困難になりました。やがて終戦、その十二月に上告審は無罪ではなく「免訴」という不本意な判決をしたのです。

先輩牧師たちは理不尽で不当な弾圧を経験して、その無念さをひしひしと味わったのですが、すべて信仰を持って受けとめました。

私たちホーリネス諸教会は毎年六月に弾圧記念礼拝をもち、ホーリネスの信仰と弾圧の歴史を確認しています。

鳥取県西部地区　2・11 集会

「鳥取県東部地区 2・11 リトリート集会報告」

2・11担当　橋原正彦
（鳥取教会）

二月十日（土）、鳥取県東部地区では鳥取教会を会場に「2・11リトリート集会」を開催した。開会メッセージで橋原正彦牧師（鳥取教会）は、過去の2・11集会の学びを振り返りつつ、憲法改正が現実味を帯びる政治情勢下にあって、自民党の改正草案では信教の自由が著しく制限されることを、具体的な事例を想定して明らかにし、教会は危機感をもって祈るべき局面に立たされていることを示した。そのうえで、教会（クリスチャン）は『平和主義ありき』の観念にとらわれるべきでないことをマタイ五章の山上の垂訓の文脈から説き起こし、2・11は建国記念の日や天皇制の問題点を追及し危機感を共有する集会や講演会ばかりでなく、主に従う者が共に祈りを合わせる日であってもよいはずと、リトリート集会開催の経緯と意義を説いた。

次に、参加者たちは教会内の好きな場所に散り、第一テモテ二：一～四を二十分間黙想した。「リトリートのしおり」に用意された四つの設問に従って聖書箇所を繰り返し読み、各自が示されたこと、思わされたことなどを書き込んでゆく。

この後、三つのグループに分かれて集会の感想、黙想した聖書箇所から示されたこと、祈りの課題などを互いにわかち合った。講演会は参加者の多くが一言も発しないまま終わってしまうが、わかち合いでは（限られた時間ではあるが）

一人一人が思いを語り、互いに聴きあうことで新たな気付きがあったり、励まされたりと、主にある兄弟姉妹の交わりの持つ底力を実感できた。

最後は全員が礼拝堂に戻り、二名の牧師が代表で祈祷して閉会した。参加者たちは新たな力を得て、それぞれの現場へと遣わされていった。

今回、地区としてのリトリート集会の開催は初めてのことで、人前で話すのが不得手な方が参加を躊躇されるなど、今後見直すべき課題も示された。

なお当日は大寒波襲来で降雪が心配されたが、天候は守られ、参加者は十九名だった。

2・11 リトリート集会 鳥取教会にて

第3回 岡山県東部地区 合同教会学校報告

玉野教会　牧師　山本博之

去る一月八日（祝・月）に、神崎緑地プラザを会場にして、第三回岡山県東部地区合同教会学校が開催されました。旭東教会、岡山教会、玉野教会の三教会が中心となって企画し、十四人（内、子ども一人）の参加者がありました。

始めに教会ごとに参加者の紹介をし、招かれた一人一人を歓迎し合い、続いて伊勢希伝道師（岡山）から聖書メッセージがなされました。その中で、ご自身が大学生活で経験した出来事をお話され、御言葉が生活の中でどのように活かされているかなどのお証しもされました。次に、私が担当してレジ袋とストローを使った凧作りをしました。レジ袋を型通りにハサミで切る作業に苦戦しつつも、ストローを竹ひご代わりに取り付けたり凧糸を結んだりと、徐々に凧の形になっていく工程を会話と共に楽しみながら進みました。仕上げにカラーペンで思い思いに絵や文字を描き、個性あふれるステキな凧を完成させました。昼食は、岡山教会の方々がタコ焼きを作ってくださり、ソースとお出汁の二種類の味で、出来たてあつあつのおいしいタコ焼きをたくさんいただきました。予定では、午後は午前中に作成した凧を外で実際に揚げてみよう！ということでしたが、当日は朝からあいにく雨が降り続き、外での活動は出来ませんでした。途中、雨が小降りになったのを見計らい、大塚忍牧師（岡山）が凧を揚げてみたところ、上手に風をとらえ、高く凧を揚げることが出来ました。午後は予定を変更しゆったりと語り合うなどして過ごし、最後に祈祷をもって会を閉じました。

今回は、子どもの参加が少なく残念ではありましたが、教会学校に来る子どもたちが非常に少ないという課題を抱える教会のＣＳ教師たちが、教会を超えてこのために祈り、準備し、一緒に楽しむことが出来たことは感謝でした。そして、これからも子どもたちにキリストの愛を伝え続けようとの思いを新たに、それぞれがまた各教会へと遣わされていきました。

手作り〈たこ〉の完成です

東中国教区第十三回
岡山県中部地区大会報告

＜新たなつながり方を見つけた！＞

牧師　嵐　護
（琴浦教会）

隔年で開催される岡山県中部地区大会は、総社市の「サントピア岡山総社」を会場に、二〇一八年一月七日（日）午後三時から八日（月）午前十一時三十分のタイムスケジュールで行われました。講師を含め五十二名の参加により、クリスマス後の新年の感慨を持って臨みました。

テーマ「『繋がること生きること、生き延びること』♡♡♡♡ つながるよろこび ♡♡♡♡」のもとに、開会礼拝メッセージ、基調講演、分団トーキングを行い、理解を深めました。また、夕食時には教会紹介を行い、倉敷教会十四名、倉敷水島教会五名、天城教会四名、児島教会四名、琴浦教会六名、総社教会四名、高梁教会十四名が揃うと、壮観でした。二日目の朝食時にはモーニング・デートを楽しみました。

基調講演は柴田彰先生（倉吉教会牧師）にお願いし、軽妙な中にも蘊蓄（うんちく）の深いお話に大いに啓発されました。「分かり易かった。感動した」の感想が印象的でした。内容では、人はいつから人と心を通わせる存在だったか。発掘により、ネアンデルタール人の化石に花粉が残されていたこと。これは人の死、埋葬の際に「花を手向けた」からでした。五万年前にネアンデルタール人は、「神が居る」ことに気が付いていました。これが聖書につながりました。人は臍（へそ）でつながり、人間としてつながり、信仰のつながりへと至る。それゆえ、人は孤独に生きることはできるが、孤立して生きることはできない。

五つの分団からは、信仰の継承はキリストとの出会い、それからのつながり。福島の伝道から教会が共同して働くことを教えられ、小さい教会の将来を示唆された。「繋がり」には、愛があり喜びがあること、現代だからこそつながっていなければならない。孤立、孤独の人への接し方は教会が方策を考える。共同牧会を検討していきたい。教会がつながりの基であった、そして、教会の中で自分の居場所を見つける。愛がなければ、自分たちの部分だけでなく、目に見えないところでつながっていることが分からない。「見えるもの」ではなく、「見えないもの」にチャンスがあることを確認した。

なお、参加費が五千円とされたことは、実行委員の方々の苦労の結果であり、教区の支援を合わせて感謝したい。今回のように、落ち着いたしっとりした交わりの中で、地区の教会がつながっていきたいと願うものです。

※　編集部より補足
文中にある八つの〈♡〉ハートマークは、岡山県中部地区の〈八つの教会〉を意味するものです。

講師の柴田 彰牧師

ニュース誌委員会より

★東中国教区のホームページを活用してください★

各委員会、各地区の集会のチラシを「ＰＤＦ版」にして下さい。
ご案内のスペースを提供いたします。

教会紹介

●倉吉教会●

牧師　柴田　彰

礼拝風景

倉吉市は鳥取県の中央に位置し、市の南部に標高四百メートルの打吹山があります。その麓（ふもと）には無数の椿の大木と四千本の桜が整備された公園があり、その近くには伝統的な白壁土蔵の建物が多く保存された地域があります。それらに隣接して倉吉教会があります。

倉吉教会は、岡山駐在の宣教師が津山を経由して倉吉での伝道を開始したことに端を発します。鉄道が開通していなかった当時のことですから、集落から集落へと徒歩で数日をかけて移動したと想像されます。かなりの労力を要したに違いありません。しかし、思い浮かぶ情景からは伝道の熱意が時空を超えて伝わってきます。

その後、「倉吉講義所」が開設され伝道活動が本格化したのは一八八九年（明治二十二）でした。明治のキリスト教会が躓（つまず）き始めたのが、明治二十三年発布の教育勅語ですから、設立間もない倉吉教会も他の教会と同様に国家統制の中で屈従の時代を過ごしていったことは容易に想像できます。しかし、それらの時代を経てもなお、主日ごとに信徒が集まり礼拝を重ねてきた歴史は、汗や涙、喜びや悲しみだけではなく、神の支えと導きの確かさであることを思います。

戦後のキリスト教ブームは倉吉教会にもあったようです。その様相については、信徒の証から窺い知ることが出来ます。ブームが終焉を迎える頃に倉吉教会は大きな決断をし、保育園を開設しました。今春には六四回目の卒園式を予定しています。小規模な保育園ですが一二六八名の幼児期の育ちに関わり、子育て世代を支援することが出来ました。

倉吉教会は人的にも財政的にも大きくはありませんが、地域に立てられた教会として保育園と共に歴史を刻むことが出来ました。教会は保育園を通して地域と関わり、保育園の働きのために祈り支える母のような存在として、役割を果たしてきました。どちらも小規模であることが、独りよがりにならないようにして下さった神の恵みのように思います。

現在の倉吉教会の様子を少し紹介します。教会学校が途絶えて久しいのですが、最近は主日礼拝の中に子どものためのプログラムを入れて、子どもと大人が共に礼拝しています。週日の集会としては、讃美歌を歌う会を月二回開催しています。参加者のリクエストに沿って一時間ほど讃美歌を歌い続けます。終わりに牧師が短く祈りますが、礼拝に来ていない人も心を合わせてくれています。

倉吉教会近影

「こんにちは」のお部屋

「思想の自動多きに居りたるなり」

セクシュアル・ハラスメント防止小委員会

副委員長　金子直子

表題の文言の主は、十九世紀後期の文芸評論家で教団伝道師も務めたという北村透谷。この一文との出会いは、第十四回教団性差別問題連絡会全国会議が開催された横浜でのことです。その意味するところは後述するとして、まずは会議の報告です。

毎年一月末開催の定期総会と協議会に今年は十五教区約五十名が参集。各教区で性差別問題、人権問題に取り組む委員会や個人が集い、セクシュアル・ハラスメントに関する協議会とも合わせて二泊三日を過ごしました。協議を終えてもなお深夜まで語り合い、教区を越えた活発な意見交換の場が展開します。今回は殊に、相談窓口をもつ教区、窓口準備段階にある教区の悲願でもあったネットワーク機能の充実に向け記念すべき第一歩を踏み出しました。

全国教区で三番目に開設された先駆的存在として十年目を迎えた東中国教区のハラスメント相談窓口も、キリスト教会とて避け難い対人関係の軋轢やハラスメントによる苦悩に真摯に向き合うために他教区との連携は不可欠。問題への対処もさることながら深い人間探求や心理の学びを基盤に、キリスト者としての自らの姿を問い直しつつ歩む共同体を目指し、共に活動を続ける友の存在に力を得て散会しました。

さて、表題に掲げた透谷の言葉は、横浜山下町の一画で見かけた「自働電話」との出会いに由来します。

日本初の公衆電話は六角の姿でＮＴＴ山下ビルの前に佇（たたず）んでいました。写真に撮り早速イラストに収めながらも気になったのが「自働」の文字。自働と自動は同義であり、自らの力で動くことだと辞典を紐解き再確認しながら、刷り込まれた慣習や思い込みに流されず、自ら考え働くことの大切さを連想していると、ふと透谷の言葉が目に飛び込みました。

自働電話　絵・金子直子さん

「その実思想の自動多きに居りたるなり」

精神の自由を語る彼は、明治の革命が武士の剣槍によるのでなく、各々の思想が自ら働いて成し遂げたと分析します。「社会組織に付帯する階級の縄を切り個人の解放」を求めつつ、互いの声を素直に聴き合える集団にこそ、確かな明日が備えられることを教えてくれた一文でした。

編集後記

三ページ最後の〈俳句〉。俳句の世界ではルビはつけない、文字スペースは空けないものとお聴きしています。

しかし今回は、編集部として筆者の田中英也さんのご了解を頂き、ルビをつけて文字スペースも入れてお届けしています。

柔軟な編集をこれからも進めてまいります。お祈り下さい。

（Ｇ記）

★ハラスメント相談窓口★

毎月第三水曜日　午前九時～午後九時

電話番号　〇九〇－一三三〇－八七三〇